

パリ通信・第145号

モリエール「病は気から」

記録的な暖冬で終わった2023年のパリだったが、年が明けると昼間も零下の寒気団に見舞われている。元旦を明るい太陽に恵まれた九州で迎えただけに、薄暗く曇って小雪が散らつき芯から凍える寒さは慣れるのに時間がかかった。

手袋、マフラー、防寒帽にダウンを着込んで劇団コメディイ・フランセーズが演ずるモリエール「病は気から」を見に行った。

コメディイ・フランセーズはモリエールを父と仰ぎルイ14世の勅令で1680年に創立され、パリ1区パレ・ロワイヤルを本拠地に古典演劇を得意とし、数々の名優を輩出してきた歴史のある劇団である。



「病は気から」(1673年作)はモリエール(本名ジャン=バチス

ト・ポクラン)(1622-1673)最後の戯曲で、散文による三幕のコメディ・バレエ(当時は演劇と音楽とバレエは密接に結び付いていた)、ルイ14世を笑わせた辛辣な喜劇である。

モリエール自身が主人公アルガンを演じ、四回目の上演直後に病に倒れたこともあり、モリエールの代表作品となっている。

より真実らしく、より分かり易く、筋が散逸しないための「三単一の法則」が明確に定義されるのが17世紀フランス古典演劇で、戯曲は一日以内(時の一致)、一つの場所(場の一致)、一つの筋(行為の一致)で演じられなければならないという規則である。

「病は気から」もその法則に則って展開される分かり易い喜劇である。

主人公のアルガンは至って健康であるが自分は重篤な病気だという思い込みで罹った「心気症」患者である。医者を目に崇拝し、薬にお金を注ぎ込み、身近に医者を確保しておきたいという自分勝手な思いから娘アンジェリックに医者になり立ての主治医の息子と結婚を強要する。

もちろんアンジェリックには想いを寄せる別の若者クレアントがいて、父親に背くことはできないが何の面白味もない医者の子息と一緒にいたいと悲嘆に暮れる。アンジェリックの実際の母親は亡くなり、アルガンはベリーヌと再婚している。ベリーヌはアル



ガンの財産が目当てで、アルガンを愛しているような見せかけの演技の裏でアルガンの財産を自分に残す遺言書に同意させることに全身全霊を注いでいる。娘アンジェリックと再婚相手ベリーヌのそれぞれの思いは全く見えていないアルガン。アンジェリックを母親代わりに守ってきた賢い召使いトワネットが医者に化けて自分のことしか眼中にないアルガンの目を開く策略を思いつく。医者を絶対的に崇拝するアルガンは召使いのトワネットが医者に扮していることにも気づかない。アルガンに死んだ振りをさせて、娘と後妻の本心を暴き、父を愛する娘アンジェリックの本心を知ったアルガンは娘の愛するクレアントとの結婚を認める。

筋は単純だかテンポの速い絶妙な会話のやり取りが見事である。日本では沈黙は金だがフランスは言葉が金。度を越して極端なまでに強調されるアルガンの盲目的な崇拝が喜劇を導いていくが、ここまで医者や医学を揶揄して大丈夫かと思う場面も少なくない。フランス人の批判精神は強烈だと思う。ワクチンも抗生物質もない17世紀の医学は瀉血や洗腸であり、専門知識のない一般大衆を言葉巧みに搾取する医者を辛辣に批判する。

モリエール没後350年経った今日、医学は格段に進歩したが「病は気から」が未だ戯曲として生きているのは単に劇団コメディイ・フランセーズの演技力だけではなく、人と病、人と医者との関係に今なお学ぶことがあるからであろう。コロナ禍で世界中が蟄居生活を余儀なくされた3年間。ようやく5類に位置付けられ一応の終息を見たが、終わってみると6-7回ワクチン接種を受けた人も多い反面、一度も受けなかった人が少なくないことを知った。感染症に関する知識もこれだけ進歩している今も医者への不信、医療への不信、拒否は消えないようである。病も時代、その時の政策、その時代のモラルと結び付いているという事だろうか。